

道徳性・宗教性を育む表現活動

——幼稚園・保育園において身体表現活動を
指導できる力量の育成を中心に——

広 瀬 綾 子

要 旨

本稿は、大学における表現活動すなわち宗教劇（キリスト降誕劇）を取り上げ、この活動がいかなるものかについて明らかにするとともに、学生が宗教劇を行う必要性および重要性の根拠について、すなわち青年は宗教性および演劇への欲求を強く持つとのシュプランガーによる見方に基づくことを明らかにした。また、宗教劇（キリスト降誕劇）に向けての練習や上演を通して学生たちは、聖書の言葉を理解する力や身体表現活動を指導できる力などを身につけるが、この活動が幼稚園教諭や保育士などの教員を目指す学生たちの人間形成、すなわち道徳性および宗教性の育成に寄与することについて明らかにした。

キーワード：身体表現活動、宗教劇、幼児の模倣欲求、青年がもつ宗教性および演劇への欲求

はじめに

キリスト教を信仰する人は、古来よりその信仰を、絵画や彫刻、建築、造形、讃美歌、教会音楽など自らの信仰をさまざまな表現方法・形態を用いて表してきた。こうしたキリスト教信仰の表現方法・形態のなかでも、演劇とりわけ宗教劇については、教会の日曜学校・教会学校やキリスト教学校において、クリスマスにおける「キリスト降誕劇」の上演のかたちでしばしば行われている¹。キリストの誕生物語を劇にした「キリスト降誕劇」は、キリスト教主義の幼稚園や保育園において、クリスマスシーズンに欠かせない行事である。世界80か国1,700園以上に広がる、世界的に評価の高いシュタイナー幼稚園では「キリスト降誕劇」が必須の教育活動である。

キリスト教主義の幼稚園や保育園における演劇（宗教劇）についての研究は、片山知子「キリスト教保育の授業内容における一考察：「聖書物語」を劇にして演じること」²、広瀬綾子「シュタイナー幼稚園における演劇の実践と理論」³などが挙げられる。これらの研究にみられるように、身体表現の側面を強くもつキリスト降誕劇は、幼児期における教育活動の一環として行われるこ

とが多い。すなわち幼児の身体活動・運動を活発にすること、言葉話す力の形成、および道徳性・宗教性を育むことなどを目的として行うのである。

幼児教育の方法としてのキリスト降誕劇を考えるうえで重要なことは、幼児期の本性を理解し、考慮することである。R. シュタイナー（Rudolf Steiner, 1861-1925）によると、幼児期の教育の方法の根本原則は、幼児の本性、すなわち「模倣」性にある。「子どもは、周囲の人のある動きを知覚する瞬間、自分の内にその動きを模倣しようとする衝動が起こるのを感じる」⁴。これは言い換えると幼児の「模倣欲求」であるが、この「模倣欲求」に基づいて、シュタイナー幼稚園のキリスト降誕劇では、園児たちが教師の動作を見てまねて動き演じ、教師の言う言葉をまねて声に出し、教師が歌うのをまねて歌うなど、あらゆる活動で幼児の「模倣欲求」を満たす活動が行われる。このことからみてとれるように、キリスト降誕劇でことのほか重要なのは、幼児が模倣する対象である教師の存在である。

ところで、幼児が全身で模倣する対象は、教師の外に現われた身ぶり、しぐさ、動作、表情、行為である。しかしシュタイナーによれば、幼児は、単にこうした外面的な身ぶり・姿だけを模倣するのではない。幼児は、さらに教師の内面の世界・精神的な世界をも模倣する。教師が心の中に抱いている気持ちや思いにまで関心を向け、それを自己の内に取り込んで模倣し、自分も同じ気持ちや思いを持つに至るのである。このことからわかることは、幼児の前に立つ教師自身が、キリストの誕生を心から祝福し、神、およびキリストに対する感謝や愛をもってキリスト降誕劇にたずさわること、すなわち教師自身がすぐれた道徳性と宗教性をもってキリスト降誕劇を行うことがいかに重要であるかということである。いうまでもなく、単なる机上の講義や言葉に依拠する礼拝だけでは、幼児教育にたずさわる教師の内に、真の意味で道徳性・宗教性を育むことはできない。実際に活動をしたり、実技を行い、自らの身体や五感を用いてキリスト教の精神や奥深さ、神髄を身をもって体験することがなにより重要である。このような活動の一つに、教師を目指す学生自らが宗教劇（キリスト降誕劇）を演じる活動を挙げることができる。

梅光学院大学では、クリスマス礼拝における宗教劇（キリスト降誕劇）が毎年行われているが、本稿では、大学におけるこの表現活動すなわち宗教劇（キリスト降誕劇）⁵を取り上げ、この活動がいかなるものか、学生が宗教劇を行う必要性および重要性の根拠について、そして、この宗教劇（キリスト降誕劇）に向けての練習や上演を通して学生たちはどのような力を身につけたのかを明らかにしたい。また、この活動がいかにして、幼稚園教諭や保育士などの教員を目指す学生たちの人間形成、すなわち道徳性および宗教性の育成に寄与するのかについて明らかにしたい。

1. 大学生が演じる宗教劇（キリスト降誕劇）

「宗教劇」には、復活祭劇、降誕劇のほか聖史劇、受難劇、聖母奇蹟劇、道徳劇など多種多様

なものがある⁶。すでに述べたように、わが国のキリスト教主義の幼稚園や保育園で行われる「宗教劇」の多くは、「キリスト降誕劇」であり、本稿で取り上げる宗教劇もまた、大学のクリスマス礼拝における「キリスト降誕劇」である。

2016年12月22日、梅光学院大学では、宗教委員会の学生有志約15名がクリスマス礼拝において「キリスト降誕劇」の上演を行った。学生の中には、子ども学部に属し、幼稚園教諭や保育士を目指す者も少なくない。キリスト降誕劇に現れる代表的なエピソードとしては、馬小屋でのイエスの誕生、東方からの三博士の旅、羊飼いたちのやりとり、ヘロデ王の幼児殺戮などが挙げられる⁷。本学の「キリスト降誕劇」もまた、このエピソードを盛り込んだものであった。

台本は、宗教委員長が執筆し、配役も学生たちで決めた。衣装や小道具、音響や照明操作などスタッフワークもすべて学生たちが行った。音響効果は、すべて学生によるオルガンの生演奏である。20分程度の上演であるが、約2か月前から放課後に、劇中で歌う讃美歌や踊りの練習などを積み重ねてきた。

宗教委員に所属する学生のなかには、クリスチャンでない者もいる。演劇に取り組む、舞台に立つのは初めてという学生もいる。クリスチャンでないある学生は、次のように振り返った。「私は今までクリスマスとは、プレゼントを交換してケーキを食べて楽しく過ごす日だと思っていました。しかしページェント⁸を通して、クリスマスの本当の意味を深く知ることができたと思います」。聖書でキリスト降誕の箇所を読むだけでなく、また礼拝でクリスマスにまつわる説教を聞くだけでなく、実際に自らの声と身体を使って、クリスマスにまつわる場面や登場人物を演じることで、この学生は「クリスマスの本当の意味」を実感したのである。

2. 宗教劇を創り上げることの教育的意義

(1) 青年の宗教性への欲求としての宗教劇

シュタイナーは、青年期を「“超越的な世界”を希求し、神的、宗教的な世界へ向かう」欲求を持つ時期とみなす。シュタイナーによると、青年期にとくに発達するのは、宗教的な世界を自らの思考力や判断力によって知的に理解する力である。つまり、自らの意志で自立的・独立的かつ主体的に宗教的な世界の探求に向かうことを意味している。同様にE. シュプランガー (Eduard Spranger, 1882-1963) も、青年の内に「宗教的憧憬および宗教的予感」⁹をみてとり、「自己の宗教的世界体験が始まる」¹⁰と述べる。シュプランガーが「青年期に始まる自己形成の過程」¹¹と述べるように、青年期は、新たな世界や価値観に目を向け、普遍的な人間愛や善・真理を追究しながら、自らのアイデンティティを確立する時期である。このような時期に、学生が、世界の歴史に大きな影響を与え、国際的視野を含有した「世界史的な出来事」を取り扱った宗教劇を体験することは、きわめて重要である。

青年期における「宗教的憧憬」¹² および「宗教的要求」¹³ とは、シュブランガーによると、「自ら個人的に伝統的宗教思想および儀礼に入り込もうとする試み」¹⁴ である。「宗教劇」をある種の儀礼とみなすならば、こうした活動に青年が強い関心と興味を抱くのは、このような理由に基づいているといえる。

キリスト降誕劇で、成人したイエスを演じたある学生は次のように述べた。「イエス様はどういう思いで、どういう姿勢で、どういう言葉のかけ方で、どういう表情で盲人をいやしたのか、深く考えることができた」。この学生は、イエスについて一般的に言われていることや聖書に記されている描写だけでは満足せず、舞台上で自らイエスとして行動し、イエスの言葉を発し、イエスを演じること、すなわちイエスを体験することでイエスの思いを深く感じたいと願ったのである。このような学生の欲求すなわち「宗教性への欲求」を満たすことについて、シュブランガーは、「今や青年は伝統を自己の体験をもって“満たさん”と欲するのである」¹⁵ と述べた。

シュブランガーが「各個性は全く自己独特の方法において神を求め体験する」¹⁶ と述べるように、青年は自分が納得できる、確信できる確かな手がかりと拠り所を求めている。それは礼拝や説教、聖書の講読、キリスト教関連の授業の受講、すなわち言葉によるものだけでは不十分である。青年の宗教性への欲求を満たす活動として、たとえば、聖書の世界や聖書の言葉、聖書に登場する人物や、聖書の一場面を演じること、すなわち聖書の世界に自分の身体を通して近づく活動を挙げることができる。この活動こそ「宗教劇」である。学生たちは自分の身体、言葉、声、心をフルに活動させ、その人物が自分の中に息づくよう、納得いくまで何度も繰り返し練習し、その人物として振る舞い行動する中で、聖書を一読しただけでは到達できない境地にたどりついた。その者だけが実感できる揺るぎない聖書の「真実」である。揺るぎない聖書の真実にたどり着くことは、シュブランガーの言葉を借りて言うなら、次のような一節で説明することができる。

「この時期において成立するところのものに、一つの根本特色がある。(中略) すなわち『これは自分の真理である (Das ist meine Wahrheit)』との感じである。この段階においては、模索や探究でもなく、また単なる疑惑や闘争でもなく、自己の確固たる立脚地の生成が問題である。今や初めて自己の神というものがあり、自己のキリストなるものがあり、自己の確信根拠なるものがある。かかる所有、かかる最初の確立は、一種の幸福感をもって感受せられ、自己の(形而上学的) 中心点に安定を与えうるものと感ぜられる」¹⁷。

(2) 青年の演劇への欲求としての宗教劇

前節でシュブランガーによる青年期における「宗教的憧憬および宗教的予感」¹⁸ すなわち「自己の宗教的世界体験」¹⁹ への欲求、およびシュタイナーによる、青年期における「「超越的な世界」を希求し、神的、宗教的な世界へ向かう」欲求を満たす活動として、学生が宗教劇を演じること

の意義を述べた。しかし、学生が宗教劇を行うことの意義や重要性の根拠はそれだけではない。

シュブランガーは、ある極めて重要な見方を示す。それは、青年の内に「演劇」への欲求が強く現れる、との見方である。このことをシュブランガーは、「観劇と演劇に熱中することは、青年の発達において必然の現象である。われわれは教育上意識的にこれを尊重すべきである」²⁰と述べる。シュタイナーの教育理念に基づき、世界80か国、1,100校以上におよぶシュタイナー学校の最終学年である12学年では、卒業演劇公演が必須の教育活動であるが、このことから、青年期における演劇の導入の重要性の根拠がみてとれる。

演劇への欲求とは、具体的に言うと、「演じたい」という欲求である。キリスト降誕劇には、さまざまな人物が登場する。天使を演じた学生たちは、讃美歌を高らかに歌い上げ、軽やかに舞い、神の使いとしてマリアに言葉を告げた。ヨセフはマリアを気遣い労わりながら、やっとのことで宿屋を探しあてた。3人の学者たちは、黄金、乳香、没薬を手にとり幼子イエスに拝謁できた喜びを歌とセリフによって全身で表現した。ヘロデ王はイエスの誕生を恐れ、手を振りかざし、声を荒げ、怒りをあらわにした。キリスト降誕の場面に登場する人物や場面は、崇高で清らかな心、野心と策略、賢愚の対立など、すぐれた人間描写で満ちている。と同時に、聖書のキリスト降誕にまつわるさまざまな場面は、現実の生活では味わうことのできない、実現不可能な状況である。シュブランガーによれば、そのような状況に身を置き、登場する人物として行動したり、言葉を発したりすること、すなわち「演じる」ことは「青年の憧憬的嘆美的」²¹であるという。「演じたい」という欲求は、キリスト降誕にまつわる聖書の箇所を読んだり、説教を聞くだけではなく、その場면을「演じる」ことで、「真理」や「理想」、「精神の高貴さ」といった宗教性や道徳性を求め、これらに向かわせる力をより発達させたいという、青年の欲求の現れである。

「青年が演劇を好むのは、演劇が人間生活の姿を写し、それが感情移入的想像を活躍せしめ、自分自身を種々なる境遇に置いて、その場면을心のうちで共演、かくして自己の心的生活の範囲を拡張することができるからである。演劇の青年に対する発達意義は、それが青年の狭い限られた生活範囲においては、とうてい現実に達しえないような生活の種々なる場面に彼を関与せしめる点にある。青年は演劇において、小説以上に豊富な多様な生活を体験し、(中略)強く内的に共鳴するのである」²²。

シュブランガーによれば、青年は「人間的体験や意志、闘争、情緒的激動が引き起こされるような動機」²³に強く惹かれ、「情緒爆発の点火材料」²⁴を求めるといふ。「情熱的なもの」²⁵を欲し、日常生活では味わえない感情や感激を求めることは、理想を追求しながら情熱と希望に燃えて人生を模索する青年の内に、刺激と満足感をもたらす。これを可能にするのが演劇である。また、シュブランガーのいう「種々なる境遇」「種々なる場面」「豊富な多様な生活」とは、日常生活や

現実生活を拡張するような世界や非日常の出来事を意味する。それはたとえば、シュタイナー学校の卒業演劇公演でしばしば行われるシラーの『ドン・カルロス』や、ゲーテの『ファウスト』などの上演作品にみてとれる。『ドン・カルロス』には、気品と流麗さ、躍動性と衝撃力に富んだセリフの見事さとともに、純粋な理想を抱き、その情熱に燃える者が、現実、社会、政治の巨大な諸力の中で苦悩し、葛藤しながらどのように生きていったかが描かれている。また、『ファウスト』には、人間がかかえる愛や希望、孤独、絶望、葛藤、苦悩といった深い内的問題意識が、文体と内容となって芸術的に形成されている。これらを体験することは、新たな世界や価値観に目を向け、普遍的な人間愛や真理、理想を追究しながら、自らのアイデンティティを確立する青年期にきわめて重要なことである。

3. 宗教劇を創り上げることを通して育まれる力

(1) 聖書の言葉を理解する力

聖書の中では「言葉」はどのようにとらえられているのだろうか。聖書には「言葉」に関するさまざまな記述がみてとれる。まず一つ目は、ヨハネによる福音書の冒頭の一節「はじめに言葉があった。(中略)すべてのものは、これによってできた」である。シュタイナーによれば、「言葉」は、単なるコミュニケーションの道具でもなく、また事物を示す記号や意味を示す符号でもない。そうではなく「霊的な力」を持ち、世界を創造する力をもっている。シュタイナーにあってはこの冒頭の一節の「言葉」は、このようなものとして把握される。

二つ目は、「ヤコブの手紙」のなかの次のような一節である。「舌は小さな器官ではあるが、よく大言壮語する。見よ、ごく小さな火でも、非常に大きな森を燃やすではないか。舌は火である。不義の世界である。舌は、わたしたちの器官の一つとしてそなえられたものであるが、全身を汚し、生存の車輪を燃やし、自らは地獄の火で焼かれる。(中略)舌を制しうる人は、ひとりもない。それは、制しにくい悪であって、死の毒に満ちている」²⁶。これは、言葉が人間におよぼす破滅的な力を述べたものである。聖書の言語観には、このように言葉のもつ偉大な力と、破滅へと追いやる力の二つの側面が示されている。では、言葉の持つ偉大な力、すなわち「霊的な力」に触れ実感できるにはどうしたらよいのだろうか。

宗教劇を通して学生が身につける様々な力のなかで注目すべきものは、「聖書の言葉を理解する力」である。聖書の言葉を理解するためには、言葉に対する感覚を豊かに研ぎ澄ますことができなければならない。単に一読しただけでは実感することのできない聖書の言葉を、身体や身振り、五感を駆使して、すなわち演じることを通して全身で接近することで、自分のものにすることができる。また、何度も繰り返し練習を重ね、自分の言葉(台詞)として発することによって、聖書の言葉やその背景を深く理解し共感することができる。このことは言い換えると、上述の、

言葉の持つ偉大な力、すなわち「霊的な力」に触れ実感することである。このように、聖書の「言葉」は単に聞き読むだけでなく、演じ表現し活動することを通して学ぶことが重要である。

演劇は、言語能力すなわち言葉に関する力の育成に大きく寄与するとされるが、その根拠は C. リッテルマイヤー（1940-）による、芸術体験（芸術教育）の転移効果についての学際的研究『芸術体験の転移効果』²⁷ にみとることができる。リッテルマイヤーによると、演劇を学んでいる学生の場合、そうでない学生と比べて言語処理をつかさどる脳神経領域がきわめて活発に活動しており、言語分析能力をより活発に使っているとされる²⁸。またかれは、「演劇の台本の内容を理解することが、自分の配役を適切に演じるための不可欠の前提となっているからである」²⁹ との理由から、テキストの理念や内容を把握する能力の点でも、演劇を学んでいる者は、高い能力を示したとの結論を導き出した³⁰。演劇を学んでいる者はテキストの理念や内容を理解する能力が高いとの結論は、キリスト降誕劇を行うことによって、聖書の言葉やフレーズの深い学びや理解が可能になることを意味している。聖書の言葉やフレーズには、比喩的な表現やシンボリックな表現が多い。単にその言葉を額面通りに受け止めたのでは、真の理解へと至らないことも多い。前後の文脈や言葉の背後にあるもの、登場人物の言動などから読み取ることが必要であるが、このことを可能にするのがキリスト降誕劇である。

(2) 道徳性

すでに述べたように、キリスト降誕劇を演じた宗教委員の中には、幼稚園教諭や保育士、小学校の教員をめざす学生や、教職課程を履修し、中学校および高校の教員志望の学生も少なくない。こうした教員志望の学生の必須科目である「道徳の指導法」や「道徳教育論」における課題の一つは、これらの授業では、道徳教育の思想・哲学や歴史を頭で学ぶだけで、そこで学ぶ知識や概念が、学生のうちで生きて働く力にならないことが多いことである。たとえば「他人を思いやり手助けすることの大切さ」「協調性の大切さ」などについて言うと、講義でどれほど多くの実例をもとに「知的に頭で」学んだとしても、その学びは頭の中を素通りするだけである。それが学生の中に定着し、活きた力になるには、実際の活動や実体験を通すこと、そして時間をかけて「実技」に取り組むことがぜひとも必要である。

キリスト降誕劇を創り上げるには、約2か月の期間を要した。時間をかけてキリスト降誕劇に取り組む中で、学生たちは上述の宗教性だけでなく、道徳性をも身につけた。宗教性と道徳性の関係については、以下のようにとらえることができる。すなわちフィヒテ（1762-1814）においては、「道徳」は、超感覚的なことである「宗教」と区別されており、宗教に至る前段階として位置づけられる。「……人間は、宗教に達するには必ず道徳を経なければならない」³¹。以下、学生たちはどのような道徳性を身につけたのかを明らかにしたい。

学生が身につけた道徳性のうちで大きなものは、学生がキリスト降誕劇に全員で取り組むこと、

創り上げることを通して育まれる協調性や責任感および利己心の克服である。学生の一人は、キリスト降誕劇を振り返ってこのように記した。「歌と劇の練習を毎日行い、参加者全員が一丸となって努力を続けた結果、最高の舞台を作り上げることができたと感じている」³²。いうまでもなく、演劇においては誰か一人欠けても成り立たない。誰かが練習を休むと、休んだ学生の代役を誰かがやらなければならない、周囲に迷惑をかけることになる。ある学生は「だれかが人任せにすると、全体的にくずれるのを感じた」と振り返った。自分さえよければいいといった利己心は、全体の士気に影響する。出演する学生はもとより、音響、照明などのスタッフを担当する学生も、一人一人が自分の役割に責任を持ち、協力し合わなければ、良い演劇を創ることはできない。

フィヒテによれば、道徳の基本課題は、他者や全体をかえりみることなくたえず自己中心的に事柄を行おうとする利己心あるいは我欲の抑制にある。このための手段としてフィヒテが提起するのは、生徒に共同生活をさせ全体のために生きることを体得させることである。「あらゆる道徳性の根源は、……子どもの利己的な衝動を全体という概念のもとに従わせることである」³³。演劇は、まさに集団での創造活動であり、その共同作業においては、口先ではなく実行が重視される。「実行 (Tun und Handeln) によってこそ、われわれはもっとも明瞭に道徳的世界に入ることができる」³⁴。しかもその実行は、強制や他人の命令によるものではなく、自由で自発的な個人の意志によるものでなくてはならない。

他にも学生たちは、キリスト降誕劇を創りあげる過程で、他人の意見を受け入れ尊重する力、互いに助け合い協力する態度、他者を思いやる力などの道徳性を身につけた。こうした道徳性は、「人間関係能力」あるいは「共感能力」と言い換えることができるが、既述のリッテルマイヤーは、演劇教育を受けたグループは、演劇の経験がないグループと比較すると、人間関係能力が明らかに優れている、との結論を導き出した³⁵。その理由としてかれは、演劇を通して共感能力が開発されるため³⁶、と述べているのである。

以上、述べてきたことにより、キリスト降誕劇は、学生の道徳性の育成に大きく寄与する活動であるといえることができる。

(3) 宗教劇を指導する力

教師を目指す学生自身が道徳性・宗教性を備えていることの重要性に加えて、さらに必要なことは、教師が宗教劇を指導する力量を持っていることである。こうした力量を身につけるためには、二つのことが必要であると考えられる。一つは、教員を志望する学生自らが宗教劇を体験し、その楽しさや奥深さを実感することである。ある学生は、「皆で一緒に何かをすることは楽しい」と記し、全員で一つのものを作り上げるのは素晴らしいことだと実感した、と振り返る。そして将来自分が小学校の教員になったら、できるならば学年全員で劇をしたい、との意欲をみせる。自分がやってみて楽しかったこと、すなわち楽しさの原体験こそが、子どもたちにもこのような

体験をさせたい、との教育実践への意欲の醸成につながるのである。

二つ目は、宗教劇を指導する教員自身が、子どもたちの前で演じたりやってみせたりする力、すなわち身体表現活動を指導できる力を身につけることである。このことの重要性の根拠を、シュタイナー幼稚園で行われるキリスト降誕劇における教師のあり方に見てとることができる。

すでに述べたようにシュタイナー幼稚園では、クリスマスの時期になると、キリスト降誕劇が行われる。園児たちは、キリスト降誕劇に登場する人物、その他に扮して想像の世界を演じて遊ぶ。すでに述べたようにわが国のキリスト教系の幼稚園や保育園でもキリスト降誕劇が行われるが、シュタイナー幼稚園におけるキリスト降誕劇は、それらとは大きく異なっている。もっとも大きな違いは、シュタイナー幼稚園では、教師が登場し、しかも教師が劇のなかで中心的な役割を果たすことである。たとえば、身重のマリアとヨセフが宿を求める場面では、円の中央で、ヨセフとマリア役の園児が宿屋の戸をたたく動作などをする。円になっているその他の園児たちは、教師が「残念ながらこの宿屋は一杯です」と歌いながら（ヨセフとマリアの申し出を）断るしぐさをまねる。つまり、園児たちは教師の動作を見てまねて動き演じ、教師のいう言葉をまねて声に出し、教師が歌うのをまねて歌う。教師が先導し、中心となって模範を示しつつ幼児と一緒に劇を行うのである。こうした教師の主導性は、シュタイナー幼稚園だけでなく、シュタイナー学校低学年での演劇においても、極めて大きく強い。教師がその場面や登場人物にふさわしい動きや演じる力、すなわち身体表現に関する力量を身につけていなければ、キリスト降誕劇を指導することはできないのである。

おわりに

以上、大学における表現活動すなわち宗教劇（キリスト降誕劇）を取り上げ、これがいかなるものであるか、大学生が宗教劇を行う必要性および重要性の根拠について、また学生はいかなる力を身につけ、この活動がいかにして、教師を目指す学生たちの人間形成すなわち道徳性および宗教性の育成に寄与するのかについて明らかにした。大学生が行うキリスト降誕劇は、シュプランガーによる青年期の本性への深い洞察、すなわち青年は宗教性および演劇への欲求を強く持つとの見方から導き出され、その適切さが実証された活動である。

すでに述べたように、シュタイナー幼稚園のキリスト降誕劇では、園児たちが教師の動作や言葉を見てまねて動き演じるように、幼児の「模倣」欲求に基づいた活動が重視される。それゆえ、幼児の「模倣」の対象となる教師の存在はきわめて重要であり、教師を目指す学生が学生時代に、実際に自らキリスト降誕劇を演じ、身体表現活動を指導できる力をはじめとするさまざまな力を身につけることはきわめて重要である。その重要な点として三つを挙げることができる。一つ目は、教師を目指す学生自身が幼児の模範となるべき高い人格とすぐれた道徳性・宗教性を身につ

けることである。二つ目は、教師を目指す学生が宗教劇を指導できる実践力を身につけることである。このような実践力は、自ら宗教劇を体験することで身につけることができる。三つ目は、教師を目指す学生自身が宗教劇を行うことの楽しさや素晴らしさを実感できることである。体感し、実感できてはじめて、「子どもたちにもこのような体験をさせたい」「将来教師になったとき、自分もこのような活動を行いたい」との意欲、すなわち宗教劇を行い、指導する意欲や技術習得への意欲につながるからである。

付記：

キリスト降誕劇を演じた宗教委員のメンバーに、キリスト降誕劇の上演とその過程を振り返ってレポートを書いてもらった。文中カギカッコ内における学生たちの感想や意見は、彼らのレポートのなかで注目すべきものを取り上げて記したものである。

註

- 1 今橋朗、奥田和弘監修『キリスト教教育事典』日本キリスト教団出版局、2010年、309頁。
- 2 片山知子「キリスト教保育の授業内容における一考察：「聖書物語」を劇にして演じること」『和泉短期大学研究紀要』34号、39-42頁、2014年。
- 3 広瀬綾子「シュタイナー幼稚園における演劇の実践と理論」『大阪大学教育学年報』第8号、大阪大学大学院人間科学研究科教育学系、123-134頁、2003年。
- 4 R. Steiner, *Der pädagogische Wert der Menschenerkenntnis und der Kulturwert der Pädagogik*, Rudolf Steiner Verlag, 1989, S.46.
- 5 プロテスタント系のキリスト教大学では、保育園や幼稚園と異なって、キリスト降誕劇を含む宗教劇が行われている大学はごくわずかである。これについての研究もほとんど行われていない。実際に宗教劇を指導できる教員がほとんどいないからであろう。また、宗教劇が青年の道徳性・宗教性の育成にどれほどの力を発揮するか、認識が薄いからであろう。
- 6 石井美樹子『中世劇の世界』中公新書、1984年、18頁。
- 7 奥田宏子『中世英国の聖書劇』研究社選書、1984年、110頁。
- 8 キリスト降誕劇は、本学では「ページェント」とよばれる。これは、すでに述べた主に中世イギリスでの移動舞台を指す用語だったものが転じて、教会の祝祭であるクリスマスやイースターなどに行われる「キリスト降誕劇」の意となっている。
- 9 E. Spranger, *Psychologie des Jugendalters*, Quelle & Meyer, Heidelberg, 1979, S.62, シュプランガー著、土井竹治訳『青年の心理』五月書房、1973年、71頁。
- 10 A.a.O., S.57, 前掲書、63頁。
- 11 A.a.O., S.56, 前掲書、61頁。
- 12 A.a.O., S.62, 前掲書、71頁。
- 13 A.a.O., S.256, 前掲書、359-360頁。
- 14 A.a.O., S.256, 前掲書、359頁。
- 15 A.a.O., S.256, 前掲書、360頁。

- 16 A.a.O., S.258, 前掲書、362 頁。
- 17 A.a.O., S.267, 前掲書、376-377 頁。
- 18 A.a.O., S.62, 前掲書、71 頁。
- 19 A.a.O., S.57, 前掲書、63 頁。
- 20 A.a.O., S.67, 前掲書、78 頁。
- 21 A.a.O., S.66, 前掲書、77 頁。
- 22 A.a.O., S.66, 前掲書、77 頁。
- 23 A.a.O., S.66, 前掲書、76 頁。
- 24 A.a.O., S.66, 前掲書、76 頁。
- 25 A.a.O., S.65, 67, 前掲書、76、79 頁。
- 26 ヤコブの手紙第3章5-8節、『聖書』日本聖書協会、1995年、362-363頁。
- 27 C. リッテルマイヤー著、遠藤孝夫訳『芸術体験の転移効果—最新の科学が明らかにした人間形成の真実』東信堂、2015年。これまで不十分であった、芸術体験や芸術教育の重要性を根拠づけるための学問的検討、すなわち芸術体験や芸術教育が青少年の認知的・社会的・道徳的能力に及ぼす作用に関する実証的研究の成果を総合的に検討したものである。
- 28 前掲書、68 頁。
- 29 前掲書、68 頁。
- 30 前掲書、68 頁。
- 31 Fichtes Werke, herausgegeben von Immanuel Hermann Fichte, ein fotomechanischer Nachdruck, 1971 (以下、FW と略す), VII . Bd., *Die Grundzüge des gegenwärtigen Zeitalters*, 1804, S.236.
- 32 「光の子」(梅光学院大学チャペルニュース No.155) キリスト教教育センター・宗教委員会発行、2017年。
- 33 FW, VII . Bd., *Reden an die deutsche Nation*, 1807-08, S.417, フィヒテ著、椎名万吉訳『ドイツ国民教育論』明治図書、1976年、125頁。
- 34 FW, VII . Bd., a.a.O., S.419, 前掲書、127頁。
- 35 C. リッテルマイヤー著、遠藤孝夫訳『芸術体験の転移効果—最新の科学が明らかにした人間形成の真実』東信堂、2015年、69頁。
- 36 前掲書、69頁。